

2007年3月23日

作田和幸元北海道新聞編集局長：

「医療九条の会・北海道」講演会要旨

1：今日の講演は以下の順序で述べるものである

- ①真実とうその見分け方（メジア放送を主に）
- ②満州国ハルビンの体験
- ③記者として活動した経験

2：私は1945年8月旧満州国ハルビンで敗戦を迎えた。同8月20日ソ連が参戦しハルビンに侵入し在留日本人の困難が始まった。

関東軍は昭和15年当時に最大戦力であったが、敗戦時は四十万人に減少していた。フィリピンなどに送られ減少したのである。現地召集の40歳過ぎた老兵が主力で兵力の低下が著しく、ソ連軍は無敵の勢いであった。

ハルビンの郊外に平房という街があり、有名な731部隊があった。表面上給水部隊と言われていたが、素晴らしい施設で、中ソの反日分子などを丸太としょうし人体実験に使った。隊員は京大医学部出身の医師が多く、隊長は石井中将で、施設の壁は3メートルもあり、爆薬を仕掛けても破壊するのは容易でないくらい堅固であった。しかし私たち民間人はその存在すら当時は知らなかった。

敗戦直後当時日本新聞がガリ版で発行され、日本は米軍に占領され全土が焦土になったと宣伝され、いっそ帰国をあきらめてハルビンに住み続けようと思った。ソ連兵の武器はマンドリンという機関銃であった。服装は武器に比べみすぼらしく、靴を履いてない兵隊、ゲートル（脚絆）を足に巻いて靴の代わりにしている兵士も居た

3；敗戦が如何に惨めであるかを作田は夙に観察してきた。

20年8月ー9月にさらに奥地の開拓民がハルビンに避難してきたが、みなボロボロの衣服で、なかにはマータイ袋をかぶったり、古新聞を体にまとって裸同然で歩いている姿もみた。

ソ連軍に占領されて最初の1ヶ月は、ソ連兵によるレイプ、略奪が横行、左手に七つ、八つの時計をはめていたソ連兵もいた。引き上げた博多港で避妊手術を受ける女性を数多く見た。

ドイツではナチス敗退時にいかなる状態であったか？が気になった。
ベルリンではどうであったか？ヘルケ・サンダー、バーバラ・ヨールという二人のドキュメンタリー作家の精細な記録によれば、ソ連軍に占領されて、最初のヶ月はベルリンの140万人の女性の内11万人が最初の一週間にrapeされた。これについてスターリンは「何千キロも流血、戦火、死をくぐり抜けてきた兵士が時に女と接してみたい、一寸したものをくすねる、その行動を理解できないか」と言ったという。これが戦争の実態なのです。

4：1955年北海道新聞社に入社した

昭和四十年代

佐藤内閣→田中内閣時代に東京支社で仕事をした。

1960年から70年代；自分は外務省、自民党本部に詰めた

当時の国際情勢は大いに揺れた；中ソ国境紛争、中印衝突。ジョンソン政権時代にベトナム戦争に介入等々。

東南アジアでは、インドネシアスカルノ大統領政権の末期で共産化阻止のため米国のバックのもとでスハルト軍がスカルノ政権を打倒した

佐藤内閣時代沖縄返還問題、国会では憲法九条を中心に、日米安保条約が論議されたがそのころ憲法改正の問題はまだ現実の論議にはならなかった。安保条約があれば現行憲法の下でも十分であるという雰囲気であった

自民党、社会党のあいだでは日米安保体制下での事前協議、核の取り扱い、極東の範囲などが論議されていた。

沖縄は当時からベトナム戦争の基地になっていた。沖縄返還にあたって佐藤内閣は核抜き本土並みの返還、非核三原則堅持を謳った。国会では事前協議、極東の範囲をめぐる議論が盛んだった。

当時私は外務省の記者をやり、夕方外務省のブリーフィングがあり、オフレコの情報伝えられた。

外務次官と夕方五時からカナッペ、スコッチウイスキーを楽しみながらの懇談があった。

オフレコ情報を新聞発表するとお出入り禁止になる。だから聞いたことの10分の1も記事にできなかった。今は情報化社会で、オフレコを逆手に使って情報操作をするケースも多いのではないか。

私はtvは信用していない。表面的にしか伝えないからだ。

5：ベトナム、カンボジア、ラオス、オーストラリアなどに出かけた

沖縄返還の半年前、事前協議の論議の実態を東南アジアで自分の目で確かめたいと思った。

昭和47年（1972年）は沖縄返還運動が盛ん、北爆停止を要望した運動も盛んであった。

南ベトナムのサイゴン市（今のホーチミン市）はまるで米軍の植民地であった。サイゴンからカンボジャへ、驚いたのはベトナム人とカンボジャ人の仲の悪さだった

カンボジャのポルポト軍が侵攻してくる直前、間一髪で脱出した。その後インドネシア、オーストラリアを回って、極東の範囲などは無いに等しく、日米事前協議などは守られる術もないことを実感した。

沖縄の核抜き本土並みは結局虚構ウソであり、これは市民の力で変えなければならない。

6：いまイラクはどうなっているか

今イラクの報道がどういうスタイルで報道されているか実態はわからない
戦争報道には二種類あって、

1：戦況報道；敵味方の戦況の大状況を報道。

2：戦場報道；いま現実に戦争がどういう状態であるか、つまり現場報道である。ベトナム戦争までは1，2の区別が明快であった。戦場報道に携わってそのため落命した記者は多い。

有名な沢田カメラマンはその一人である。米国内の反戦運動が盛んであったのもその一因がそこ（戦場報道）にある。

米国はベトナム戦争はマスメディアの所為で敗北したのだと認識した。それ以後の戦争ではアメリカはマスコミを徹底的に押さえ込むと同時にそれを逆用して情報操作を行うと考えている。

湾岸戦争以来メジァ規制が常套手段となった。米英は green books というルールブックを作り事細かに従軍記者規制が義務づけられている。イラクには3000人の新聞記者が居るが、600人はこの規制を受けている。彼らは司令部にいて戦況報道は出来るが戦場報道はできない。

日本のマスコミは米国のそののコピーしか出来ない。しかし戦争の真実はやがて明るみになるものである。3000人の記者がいるから

7：サダムフセインはそんなに悪い人間だろうか？

十九世紀までの戦争では領土拡張、資源略奪が主目的であった。現在は侵略は世論が許さない。正義のための戦争と言うが一体米国のイラク戦争の正義とは何か？

フセインを悪に仕立て上げなければ戦争の大義が得られなかったのである。そしてその陰にうごめく石油問題についてはだれも触れようとはしない。石油資本が裏でどのように関わっているかを日米のニュースは書かない。ノーマン・ソロマンという米国のジャーナリストは戦争の最初の犠牲者は真実であり、次は良心あるのべているが、けだし至言である。

8：日本の四十年代五十年代（1960年代から80年代と重なる）は憲法改正は考えていなかったがその後の変化は著しかった

池田・佐藤内閣の頃は憲法改正は現実の政治テーマにならなかった。むしろ憲法九条下の安保体制の拡大解釈のみが争点であった。

その後政治の系譜は岸信介の流れを汲む福田→小泉→安倍とがらりと系列が変わる。

今国民投票法案が日程に上っている

そもそもそれをバックアップしたのは中曽根である、彼はマッカーサーに働きかけ憲法改正を仕掛けた。

当時の CIC の世話でハーバード大学の研研究会に招待されその折りにキッシンジャーに愛された。

自衛隊はイラクにも行くようになった

核三原則は無視され、原子力空母が我が物顔に各地の港に遊弋している

防衛庁は→防衛省に昇格するようになった。

米国は政府の改憲論に不快感を示さないし、むしろ、米国国力低下の補完のために日本を利用しようとしている。

護憲派は今のところ加藤紘一くらいである

9：反米で自主独立の脅威は米もこわがっていた

中川一郎（反米・親ソ）を嘗てのソヴィエトのコワレンコ氏が注目し、親ソ派の政治家に利用しようとしてスースロフに働きかけるが（中川は）自殺した。

コワレンコによると中川は米国の CIA にころされたとされている。

10：新聞界の動き

中川一コワレンコの仲介をしたのは朝日 TV の三浦甲子二氏である。

読売の正力松太郎は日米野球、日本テレビ、原子力など米国と深い関係を結ぶ。産経は財界の水野茂夫のきもいりでできた。新聞はその主張の背景に、生い立ちとさまざまなつながりがあるのである。

11：終わりに

サイレント、マジョリチーを代表する今全国各地で「9条の会」が広がっているのは心強い。フィンランドは750年の長きをロシアやスエーデンの圧迫に耐え独立を勝ち取った。シベリウスのフィンランディアを私は時に感慨も持って聴くことがある。それくらい独立とは長年月の努力を要するのである。

アメリカからの従属を断ち切り、真に自主独立、平和をめざす国家になるためにねばり強い国民の意思表示をますます強めていかなければならないと考えております。